

藤村「処女地」に執筆した女性作家達（二）

—— 加藤みどり、島崎静子、鷹野つき、若杉鳥子 ——

永 淵 朋 枝

序

島崎藤村が創刊した婦人雑誌「処女地」（大11「一九二三」・4
大12「一九二三」・1）に執筆した女性作家（文学事典等に項
目のある一名）は、どのような人達だったのか。本稿では、加
藤みどり、島崎静子、鷹野つき、若杉鳥子の四名を取り上げる。（一）
略歴、主な著書、項目のある事典、（二）評伝、年譜の有無や研
究状況、（三）同時代批評等、（四）女性作家達が「処女地」に
発表した作品、「処女地」や藤村についての言及を調査し、主に
著書から彼女達にとつての「処女地」の意味を明らかにする。氏
名は、一般の事典の掲載名を用い、「処女地」終刊号「附録 本
誌執筆者別総目録」掲載名が異なる場合は、それを「」内に記
す。なお年齢は、満年齢で表記する。

一、加藤みどり

（一） 明治二二「一八八八」年八月三十一日（大正一一「一九二
二」年五月一日。長野県上伊那郡赤穂村（現駒ヶ根市）生まれ。
本名高仲きくよ。代々医師である地元の名士の長女。一一歳の時
に母が死去、四人の弟妹の世話をしつつ、文学にあこがれる。尋
常小学校高等科卒。明治三九年、弟妹の勉学の監督者として上京
し、一軒家を借りて煙草屋を始める。徳田秋声に師事し、高仲菊
子の筆名で「女子文壇」誌上に活躍、河井醉茗の「詩人」、「新声」、
「文庫」にも作品を発表するようになる。「詩人」（明41・5）に
掲載された「高仲菊子は煙草商をよして、専心文芸の修養に入る」
を読んでみどりに恋した加藤朝鳥あさトリの強い求愛に応えて、早稲田大
学英文科に在籍、翻訳等をしていた朝鳥と同棲、朝鳥の卒業後、
自由結婚（明42結婚式、翌年入籍）。子供の誕生による生活難か
ら明治四四年朝鳥が大阪新報記者となって大阪に移り、岩野泡鳴、

清子と交際。みどりは同年創刊された「青鞥」に、結婚によって男とは逆に穩かに燃えて来た女の情が「生の執着」となるという「執着」(明45・4)や、イエーツの「幻の海」を演じた昂揚感を描く「芸術と春」(大2・10)等の自伝的小説を発表。朝鳥が、近代劇協会の機関紙「近代」の編集、興業にかかわることになり、大正二年上京(「近代」は創刊号のみで廃刊)。みどりは引き続き「青鞥」に、「貴い芸術の道に共に進」もうとしつつも生活の重荷の中で相反していく夫婦の様子、子供に対する愛情の執着よりも自分を表現したい妻の苦悩を描き(「風吹く日」大3・1)、「一日外で活動して来て子ども待つ家庭に帰る時、真に安らげき『休息』を思ふ」今迄呪つて居た家庭と云ふものをつくづく有難く思ふ(「読んだものの評と最近雑想」大3・5)とも書いた。

「ピアトリス」「文章倶楽部」「中央大学」等の雑誌の他、恋愛から結婚に至る体験をもとにした小説「呪ひ」(「舊城新聞」大2・12・2)大3・1・22、創作「咲く花」(「世界新聞」大6・12・10)大7・2・10。新聞廃刊のため未完)等、新聞にも小説を連載。男女の相克を巧みな筆致で描いた作品が多い。「読売新聞」(「一疋の蛸」大9・8・24(27等)、「おとぎの世界」等に、童話も書いた。みどりは、子供を主人公にした「成人がよんでも立派な」西洋の小説のようなものを書いてみたい(「新しい意味の少年少女の読み物」、「処女」大5・1)と書いている。

この間みどりは、意図的に夫婦別居したり、里子に出した次男を亡くしたりする。大正三年には東京日日新聞社の記者として働

いた。大正九年九月、朝鳥は「爪哇日報」主筆として単身ジャワに行き、みどりと子供達は鳥取にある朝鳥の実家に滞在していたが、みどりが子宮癌を発病。十一月には上京して手術、翌一〇年三月からは長野の実父の病院で静養、八月に帰国した朝鳥に連れられて再上京、入院したが、幼い二児を遺して、三三歳で病没。主な著書については、「逝ける女流作家 加藤みどり氏」(「読売新聞」大11・5・3)に「長編小説『新潮』『昨日の薔薇』等によつてその名を著した」とある(「処女地」6号の紹介も同様)。「新潮」は国文学研究資料館所蔵、奥付はなく、裏表紙下に「岡本発行」、初頁に「大阪市西区靱南通五丁目」「光島貸本店」の押印がある。信州を出て東京神田の仏英和高等女学校に通う姉妹の姉藤尾を中心に、父の死、藤尾に言い寄る男の子供を産んだ同郷の文筆家の苦悩、元芸者の義母の借金、華族の息子の求婚等を織り交せて、藤尾が真の孤独を解する相手と結婚するまでを描く。「昨日の薔薇」は未見。

『「青鞥」人物事典』、『日本女性史大辞典』等に項目が立てられている。

(二) 評伝に、岩田ななつ『青鞥の女 加藤みどり』(青弓社平5・4年譜付)がある(「加藤みどり小伝」、『国文鶴見』平2・12もある)。堀場清子『習俗打破の女たち』(ドメス出版 平10・11)、岩田氏『文学としての「青鞥」』(不二出版 平15・4)にも取り上げられている。なお、夫朝鳥が「滅び行く生に対する伴奏」亡妻加藤みどりに「(「婦人公論」大11・10)を書いている。

(三) 「芸術と春」は、芸術に生きようとして父と争い、子を

忘れようとする悦子と夫とその周囲の人々が巧みに描写されている(十束浪人「十月の文芸雑誌」、「東京日日新聞」大2・10・7、

「別れての三日」は、祖父病気の電報を受け取った夫が「待ち兼ねてゐたうまい口実を得たかのやうに自分等の煩はしい家庭から逃れて行つたやうに感じられ」た、という「かゝる場合に於けるかゝる女の心持が巧みに書かれてある」(同「四月の文芸雑誌」、

同、大3・4・9)、「斯う云ふ階級にある男女の生活の一面が可なり客観化されてゐる。事象を静かに観察する余裕を示してゐるところに、作者としての経験が見えてゐた」(石坂養平「四月の文壇」、「帝國文学」大3・5)等と評された。また、ミヒアエリス

『離婚せる四十女の思ひ切つた告白(危険なる年齢)』の感想を別居している夫に書き送る形で語つたみどりの「危険なる年齢」を「面白く読んだ」「格別に取立てゝいふほどの言葉ではないにしても少くとも真実である」(徳田秋声「一隅より」、「読売新聞」

大3・5・18)、「片足を切断した職工と看護にあたるその友人の妻とのことを書いた」「足」は真情の流露を見る佳作(紅楓生「新日本」、「やまと新聞」大5・6・11)等と評された。「処女」(大

4・10)、「新潮」(大6・4)には、「加藤朝鳥氏の家庭」の写真口絵がある。「明治大正文学美術人名辞書」「加藤朝鳥」の項に「夫

人みどり女史も閨秀作家として名をなしてゐる」とある。

青鞥社編『青鞥小説集 第一』東雲堂 大2・2。「叢書」青鞥の女たち 第7巻「不二出版 昭61・2に復刻 解説付」に「執着」

収録。

(四) 処女地 5号 大11・8 故加藤みどり「借家住居上」

処女地 6号 大11・9 故加藤みどり「借家住居下」

——子供と自身の健康のために田舎の借家住居をするようになつた美しい婦人が、親切そうに見えて欲深い大家に困らせられる小説。「この一編は先頃亡くなられた加藤朝鳥氏夫人の遺稿である。

みどり氏は徳田秋声氏に師事し、生前に発表した創作も少くなかつたことは人の知るところである」(5号)等と書かれている。

「処女地」発刊はみどりが重病になつてからなので、生前のみどりと「処女地」は直接関係しない。朝鳥「滅び行く生に対する伴奏」(前出)には、みどり入院中、佐藤緑葉や加藤武雄を中心に朝鳥の翻訳『黎明』を高値で買つてもらつ病床慰問の会が組織

され、「野口米次郎氏有島生馬氏島崎藤村氏平塚明子氏埴原久和代女史その他十数名」の同情を得た、とある。藤村と、「処女地」

同人となる埴原久和代の名が見える。藤村は「処女地」4号(大11・7)「読者へ——発行者のペエジ」欄において、「爪哇^{ジャバ}婦人カ

ルチ二の手紙(加藤朝鳥君近著『爪哇の旅』より)」を紹介した。

同号「書架」欄にも、河口玲子による朝鳥訳『薔薇園』の紹介がある。

二、島崎静子(河口玲子)

(一) 明治二九「一八九六」年一月八日「昭和四八「一九七三」年四月二九日。医師浦島堅吉、加藤幹の次女として東京に生

まれる。旧姓、加藤。胸部疾患から幼少期より病弱、東京府立第一高女卒業後、女子英学塾（現、津田塾大学）を病気のため中退。

この間、病氣療養の数年を送り、女学校卒業後に受洗。大正一〇年三月、女子英学塾の伊吹信子に誘われて藤村宅を訪ねたことから、「処女地」編集助手をつとめる。編集主幹の徳光まつ子の発病、帰国、結婚により、「処女地」編集に従事。河口玲子の筆名でエレン・ケイの紹介につとめた。「処女地」廃刊後も、藤村の読書指導を条件に秘書として飯倉の書齋に通う。藤村「三人」（「改造」大13・4）の主人公実子のモデルとなる。昭和三年一月、二四歳年上の藤村と結婚。長編『夜明け前』（「中央公論」昭4・4）

昭10・10）をはじめ藤村の執筆を、日常生活のみならず、口述筆記、資料筆写等によって支えた。昭和十一年、アルゼンチンで開かれた国際ペンクラブ大会に日本代表として出席する藤村に同伴。昭和一八年八月藤村死去の後、戦禍の中を藤村の関係資料を守る。カトリックに改宗し求道生活を送りつつ、藤村の思い出を著述した。

著書に、『藤村の思い出』（中央公論社 昭25・5）、『藤村妻への手紙』（編著 岩波書店 昭43・7）、『ひとすじのみち——藤村とともに』（明治書院 昭44・6）、『藤村研究 風雪』（1・10号）に毎号寄稿した藤村の思い出を中心にまとめた『落穂——藤村の思い出』（明治書院 昭47・11）がある。「文芸」「新女苑」等にも、藤村の思い出を掲載した。

『日本近代文学大事典』『島崎藤村事典』『日本女性人名辞典』

等に項目が立てられている。

（二）『藤村妻への手紙』に「静子略歴」がある。伊東一夫「静子夫人の思出」（『島崎藤村研究』昭55・9）、『島崎静子』（『島崎藤村コレクション』3 藤村をめぐる女性たち）国書刊行会 平10・11）等が面影を伝えている。

（三）藤村研究において、静子の文章は藤村の日常と精神を伝える近親者の貴重な記録として評価されてきた。僅かではあるが、静子が藤村を「余りの偉ぶつにして」、暗い事件にはふれず、子供との関係等を書かなかつたので、藤村の真実の姿を浮彫りにしていない、という指摘もある（板垣直子「島崎静子著『藤村の思ひ出』」、「国文学 解釈と鑑賞」昭41・9）。

『群像 日本の作家4 島崎藤村』（小学館 平4・2）に「ひとすじのみち」、『島崎藤村『夜明け前』作品論集成Ⅰ』（大空社 平9・11）に『藤村の思ひ出』抄録、同集成Ⅱに『夜明け前』執筆当時の藤村（『島崎藤村全集月報』筑摩書房 昭31・6）収録。

（四）処女地 1号 大11・4 河口玲子訳「エレン・ケイの生涯（ハヴロツク・エリスより）」——英訳版『恋愛と結婚』につけられた序文の邦訳。

処女地 1号 大11・4 玲「ワインゲルの女性観 男子の眼に映ずる女性」（手帳³）——島村民蔵の紹介したワインゲルの形而上学的禁欲主義を出発点としたい。

処女地 2号 大11・5 河口玲子「蕉子様に」——叔

父一家が同居した夏にいた孤児の小間使いへの思い。

処女地 2号 大11・5 玲子「日記から」(手帳)——
アメリカではケエの理想は実現されているという見方に対して、
「男女の交際が許るされていれば必ず自由」「愛の結婚」が「実
現されるかどうかは、計りがたい」。

処女地 3号 大11・6 河口玲子「エレン・ケエ女史
の幼時」(訳)——「Ellen Key」…… by Nystrom-Hamilton に拠る。
同号冒頭にはケエの写真が二葉掲げられている。

処女地 3号 大11・6 玲子「花の言葉 玉簾」(小品)

処女地 4号 大11・7 玲子「疑問」(手帳)

処女地 5号 大11・8 静子「猿楽町より」(手帳)——

蕉子発病から全快まで。

処女地 6号 大11・9 玲子「秋草 朝顔、われもか

う」(小品)

処女地 6号 大11・9 玲子「ホーム」(手帳)

処女地 7号 大11・10 加藤静子訳「少数と多数」(エ

レン・ケエより) (一)

処女地 8号 大11・11 加藤静子訳「少数と多数」(エ

レン・ケエより) (二)

処女地 9号 大11・12 河口玲子「蕉子様に」(手帳)

処女地 10号 大12・1 河口玲子「猿楽町より」『エト

ランゼエ』を讀みて

処女地 10号 大12・1 河口玲子「処女地の終に」

思ひ浮ぶまゝ——創刊号エビグラフに掲げられた「わたしたち
の周囲にある空気は重い、窓を開けはなて、自由な空気をそゝ
ぎ入れよ」というロマン・ロランの言葉を引き、「処女地」は「今
の時代を真面目に歩まうとする女の人々の心でした」「今はこの
小さな窓を閉ちて更に大きく打ち開いた私達に徹する自由を呼吸
しませう」と書く。

エレン・ケイの紹介が目立つ。右の一覧には「書架」欄掲載文
はあげていないが、本間久雄『エレン・ケイ思想の真髓』を1号
「書架」欄で紹介しているのも、静子である。ケイは正時代の
女性解放に大きな影響を与えた思想家で、「青鞥」誌上にも平塚
らいてうや山田わかが『恋愛と結婚』や『児童の世紀』の訳を試
みた。『恋愛と結婚』(原田実訳 天佑社 大9・1初版発行の大
12・2十六版 英訳版序文の原田訳付き)は、藤村と静子の読書
指導にも使用され、書き込みの入った本を馬籠の藤村記念館が所
蔵している。

藤村の「絶筆 東方の門」と共に掲載された、藤村死去の様子
を書いた静子「一人の甥に與ふる手紙」(「中央公論」昭18・10)
は、「処女地」の基本形式だった書簡形式で書かれた。著書『ひ
とすじのみち』には、ことに「処女地」時代の記述が多く、「処
女地」の編集や発送の日の様子、文壇に出るために藤村を「利用
」したいが、藤村はもう下り坂かもしれないと言つ編集主任と、藤
村への敬愛だけを持っていた静子との会話等が描かれている。ま
た同書冒頭は、「処女地」第一号のロランの言葉、野緑、章節代

わりの三つ点がそのまま記されている（『落穂』にもロランと野線は引き継がれた）。静子にとって「処女地」は、執筆の拠り所であったのだろう。

夏は四時、冬は五時に起床後すぐに書齋に入り、執筆は午前中と決められ午後三時になっても一仕事終えなければ昼食はとらない、という日が『夜明け前』執筆中七年間続いた、というような静子の文章は、確かに興味深い。けれども、藤村は「人生の先方を指し示してくれる一人の師であった」（『ひとすじのみち』）という執筆態度で貫かれている。『ひとすじのみち』には、ホームをつくろうと結婚後二年間真剣に努力したがホームができなことを訴え「先生に永遠の友情を誓った日から」、家人としてではなく「創作に励む先生のため」だけの生活になった、とあり、末尾には「この世のご奉公がすんだら、大磯の松籟の音を一緒に聞こうじゃないか」「……」「永久に聞こうじゃないか」「……」「その時こそ、ホームをつくろうじゃないか」という藤村の言葉（会話）が描かれている。藤村一流の詩情でくるんでいるが、ホームは二人にとつて問題であり続けたにもかかわらず、藤村は生前に静子とホームをつくろうとはしなかった、ということであろう。

『夜明け前』等の作品は確かに静子の内助がなければ書かれなかったであろう。けれども、七人中三人の子を亡くし四女出産の際に死去した先妻冬子との生活を『家』に描き、姪こま子とのことを『新生』に描き、身近な人のことを描き続けた藤村が、その後関心が移ったといえるのかもしれないが、静子との生活を中心

に据えた作品は描かなかった。静子は書齋では沈黙を守り、「主人に従って日々を送るという以外には、私の力は及ばなかった」（『藤村の思い出』）と書いている⁴。このような関係は、それ自体は文学作品として描くものではなかったのかもしれない。しかしながら、「処女地」からの「ひとすじの道」を信じ、夫と一心同体となつて、夫の芸術を助け守つて生きぬく（『藤村をめぐる女性たち』前掲）生き方を選び、全うしたのは静子自身なのである。

三、鷹野つぎ（鷹野つぎ子）

（一）明治三十三年「一八九〇」年八月一日（戸籍では二五日）昭和一九四三年三月一九日。静岡県浜名郡浜松町（現、浜松市）生まれ。本名、鷹野次。旧姓、岸。灯油等を商う旧い商家の次女。父は町の名士であつた。浜松高等女学校在学中、父をはじめ周囲に反対されつつ、藤村の詩集や与謝野晶子の歌集等を読み、「女子文壇」等に投稿。卒業（明40）後、県立静岡高等学校研究科に入学するが、同年トラホームのために退学。浜松の文学同好会に入会し、その中心となつていた遠江新聞記者、鷹野弥三郎と恋愛。結婚に際して父の猛反対にあつた。つぎは家を出て名古屋新聞に入社していた弥三郎のもとにはしり（明42）、松島十湖の養女として入籍して結婚届出（明44）。つぎは、家と親を捨てた心のいたみを後年まで書くことになる。夫の勤務先の移動に伴つて名古屋、豊橋、東京、沼津、福島と転住。豊橋では、文芸同人誌「一隅」を発行し（大2・1・10）、夫婦共に毎号小説

を載せた。大正六年弥三郎が時事新報の記者となつてからは東京に定住、藤村と面識のあつた夫弥三郎に伴われて、大正九年夏藤村を訪ね、書きためたものを見てもらつた。「処女地」創刊の頃にはすでに「新小説」「早稲田文学」「新文芸」等に作品を発表していた。「処女地」には、ほぼ毎号小説や評論を発表し、終刊号には同人を代表して「告別」の辞を書いた。最初の小説集『悲しき配分』（新潮社 大11・12、装幀は「処女地」同人の埴原久和代）に寄せた、「地を踏みしめ／＼して」「若い時代が歩いて来る」という藤村の序文「聲音」（『春を待ちつゝ』大14・3所収）からは、藤村の期待がうかがえる。弥三郎は一〇～一一年、大阪に単身赴任し編集副部長等をつとめたが、上司と衝突したこともあり、二年の関東大震災による時事新報社社屋の全焼、事業縮小に伴い失業。この後、出版業等さまざまな事業に失敗し、一家は貧窮、さらに九人中七人の子供を結核等で亡くし、つぎ自身も大正一三年以降一九年間、結核の闘病生活を続けた。この中で、つぎは、理性的に柔軟に自分と身辺のことを観察し、家庭生活や療養所生活、女性の問題等を、抑制された表現の中に情感をこめた文章で、小説や随筆、評論に書いた。喪つた子供達のことを書いた文章は悲痛であるが、つぎは「私にならべられた不幸よ、私がこの中から明るみを見落としてゐたことこそ真の不幸ではなかつたか」（『裏門の道』「限りなき美」所収）と書いている。

つぎは二冊の著書を遺した。「処女地」以前の作品等を編んだ小説集『悲しき配分』（前出）、『処女地』発表作品等をおさめ

た評論・感想集『真実の鞭（表現叢書）』（二松堂書店 大12・5）、「処女地」発表作品等をおさめた小説集『ある道化役』（紅玉堂書店 大13・3）を刊行。そして、三男出産、つぎ結核罹患回復、長男結核で死亡、四男、五男出産、五男疫痢予防薬のため死亡、三女結核で死亡、つぎ結核再発といった一一年間を経て、この間に発表した教育関係の評論を集めた『子供と母の領分』（古今書院 昭10・11）、約四年間の療養所生活を書いた随筆集『幽明記』（古今書院 昭15・4）、浜松での幼時の回想記『四季と子供』（古今書院 昭16・5、奥付は昭15）、大正初期からの女性論を集めた『女性の首途』（古今書院 昭17・10）を刊行、翌年、五二歳で病没。

遺作を四冊に編集し出版社に渡した弥三郎がつぎの半年後に病没した後、療養所の同病者を人生の縮図のように描いた小説集『限りなき美』（立誠社 昭18・11）、高等女学校時代の回想記『娘と時代（女性叢書）』（三國書房 昭19・1、奥付に三〇〇〇部とある）、小説集『太陽の花』（輝文館 昭19・2）、随筆集『春夏秋冬』（山根書房 昭19・3）が出版された。つぎ没後、弥三郎はその故郷、信州松原湖畔に文学碑を建設するために奔走、秋田雨雀が建設主旨案を書き、藤村が揮毫を承諾していたが、藤村、弥三郎の死、戦争の激化等で実現せず、昭和六一年小海町民代表の委員会によって松原湖畔に文学碑建立。

『明治大正文学美術人名辞書』『日本近代文学大事典』『島崎藤村事典』『現代女性文学辞典』『日本女性人名辞典』『日本現代文学

大事典』『日本女性文学大事典』等に項目が立てられている。

(二) 評伝に、つぎの母校の後身、浜松市立高等学校教諭の後藤悦良『鷹野つぎ——人と文学』(浜松市立高等学校同窓会 昭56・10)がある。浜松市の有志によって『鷹野つぎ著作集』全四巻(鷹野つぎ著作集刊行会編 谷島屋 昭54・6)が刊行され、作品年譜(弥三郎編、三弥子補)、後藤氏による略年譜、解題を付し、未発表の短歌が抄録された。さらに、つぎの小説、評論・随筆、つぎ宛未公開書簡を抄録した東栄蔵編『鷹野つぎ——人と文学』(銀河書房 昭58・7、東氏、市原正恵氏の論あり)が刊行された。書簡からは、つぎが、長谷川時雨、平塚らいてう、高群逸枝、奥むめを、金子しげり、宮本百合子、平林たい子、等の婦人運動家と交流のあったことがわかる。『島崎藤村研究』にも『鷹野つぎ日記』『鷹野つぎ歌集』より(昭51・11、昭55・9)が紹介されている。書簡や歌稿、日記、遺作類は、遺子鷹野三弥子によって守られてきた。ほかに、吉田知子『鷹野つぎのこと』(新潮 昭54・9)、藤枝静男『平沢計七・鷹野つぎのこと』(鷹野次弥のこと)、『群像』昭54・10、昭55・8)、東栄蔵『藤村の愛弟子 鷹野つぎの文学』(島崎藤村研究 平6・9)、(鷹野つぎ)藤村をめぐる女性たち』(前出)、阿部浪子『苦悩の女性作家 鷹野つぎ』(『大法輪』平18・6)等もある。

(三) 『撲たれる女』は、「女らしいこまやかな気持をデリケエトなしなやかな筆で出している。一寸素木しづ氏を思はせるが、素木氏より客観性に富んでいて、もつと大きく伸びさうな人であ

る」(生田春月「八月の創作」、「文章世界」大9・9)、『黄昏』は、「女らしい繊細な心持を、繊細な筆で」よく描けているが、アクセントが弱過ぎ、文章の曖昧なところがあるので、狙いどころがはっきりしない(加藤武羅夫「四月の創作」、「読売新聞」大11・4・12)等と評された。

『悲しき配分』は、生活の基礎の上に立つ細かい観察等、男性の作家からは期待され得ない独自の世界を示し、女性の世界に対する新しい理解と共感とを示唆する、いかに小さな世界でもその世界を真に確呼として把握している作者に敬意を払う(生田春月「悲しき配分」を読む)、『時事新報』大11・12・14、15、16)、『処女地』が生んだ最も未来ある殆んど唯一の作家の短編集、『平凡な家庭生活に題材を取り乍ら、憎い程落付いた筆で、しかも最もつましやかな技巧を以て描写した』(男性の感じ得ない境地を示して呉れる)最近の文壇の「収穫である」(『新刊紹介』、『太陽』大12・4)等と評された。

「自然派老大家連の影響をうけすぎてゐるなど思ひながらも、結局藍より出でゝ藍よりも青いこの作家の見方、描き方に敬服せざるを得ない」(『寂しき焰』の評。生田長江「新年の創作」、「報知新聞」大12・1・13)、『処女地』が生んだ唯一の閨秀作家鷹野つぎ女史は、古くしては樋口一葉、近くしては素木しづ子女史を想はせる、日本婦人の生活を静かによく見成つて、それを丹念に描き出さうと努力する作家のやうである(小嶋徳弥「ある道化役」、「時事新報」大12・2・9)、現在文壇の女流の双壁は鷹

野つぎ氏と藤村（宇野）千代氏であろう、鷹野氏は「女性の本領を巧みに捉へて、繊細に描写し」「地味で堅実な歩調」で「静かな自己反省と理智的な思索の世界に浸」っている（上泉秀信「読後の感想」、「都新聞」大12・6・19）等という評もある。

単行本未収作品についても、「独り陽の下に」は、「あるものは唯小智の堅くるしい迷ひばかり」（石浜金作「二月創作評」、読売新聞「大13・2・6」、題や無駄な前半は「作者の一考をわづらはしたい」が「この作の美点を気づいてやれないやうな文壇ならば、文壇はのろはれていゝ」（佐藤春夫「諸家の作品」、報知新聞「大13・2・12」等と評され、他にも、「嘆き」「老婆」等、多数、月評等で取り上げられた。『明治大正文学美術人名辞書』（大15・4）には、小説・評論・随筆等「創作能力の無限を示してゐる」と書かれ、「文壇新人年譜（二）」（文章倶楽部「大15・10」）には、中条（宮本）百合子、吉屋信子、宇野千代と共に自筆年譜を寄せた。プロレタリア系雑誌にも執筆したが、「拝金家」は雰囲気は下層階級かもしれないが、そこには「何等の意志もなく、社会主義的認識も無い」（赤木健介「陣営を俯瞰して」、「文芸市場」昭2・2）という評もある。死亡記事には「悲しき配分」その他の作品で一躍聞秀作家として知られたが、数年来生活苦と病魔のため不遇な療養生活を続けてゐた（『朝日新聞』昭18・3・20）等とある。

「処女地」掲載「帰省した子供達へ」は、一部「現代婦人の手紙」（河井醉茗編 アルス 大13・4）に収録。『女流作家十四

人集』（高陽社編輯部編 高陽社 大13・9）に「打擲」、婦人問題の諸相（満月会編 帝国講学会 大14・11。『女性のみた近代』⁰²¹ ゆまに書房 平17・3に抄録）に「子供は希む」、『続プロ（プロレタリア：論者注）大家最近傑作選集』（解放社 大15・12）に「白痴」、「新しき村の十周年」を祝つための「十年」（佐藤春夫編 改造社 昭4・9）に「嘆き」収録。戦後、『現代文学代表作全集 第三卷』（廣津和郎等編 萬里閣 昭23・7 解説付）に「草薺」、「大正小説集」（江口渙「ほか」著 筑摩書房 昭32・12 解説付）に「悲しき配分」、さらに、『日本の名随筆18 夏』（山本健吉編 作品社 昭59・4）に「虫干し」、「日本の名随筆91 時」（三木卓編 作品社 平2・5）に「時」、「女性のみた近代011 戦時下の女たち」（ゆまに書房 平13・1）に「昭和の声」、「編年体大正文学全集 大正11年」（ゆまに書房 平14・7 解説付）に「朝なき家」収録。また『叢書「青鞨」の女たち第20巻』（不二出版 昭61・6 解説付）に「悲しき配分」復刻。

（四） 処女地 1号 大11・4 鷹野つぎ「帰省した子供達へ」（手紙）——「余りかうじつとさせて置いてもらうと、勿体ないやうな気がしますよ。矢張り傍であなた達に騒がれてゐた方が、どんなにいいかな。でないと母さんの半分がそちらへ行つてゐるやうで、変で仕様がないうですもの」。「留守居」と改題して『ある道化役』に収録。

処女地 2号 大11・5 鷹野つぎ「不安」（小説）——『ある道化役』に収録。

処女地 2号 大11・5 つぎ「汁の実」(手帳)——「汁の実」5・7・9号「家事のひまに」6号「人並みの人間」は、掲載順にまとめて、「家事のひまに」の題で『真実の鞭』に収録。

処女地 3号 大11・6 鷹野つぎ「新婚後の妹へ」(手紙)——「道づれ」と改題して『ある道化役』に収録。

処女地 3号 大11・6 つぎ「花の言葉 椿と山吹」一つの暴風雨を越えて」(小品)——躑躅と棕櫚の会話を書いた藤村「樹木の言葉」(飯倉だより)大11・9)の形式に近い。『真実の鞭』に収録。「椿と山吹の対話」と改題して『太陽の花』に収録。

処女地 4号 大11・7 鷹野つぎ「朝なき家」——妻が若く美しいというだけを喜ぶ学者の夫と情念な妻が「夫も妻も勝手にお互いの存在を蝕むやうな、惨たらしい沈黙」の時を持つ。『ある道化役』に収録。

処女地 5号 大11・8 つぎ「家事のひまに」(手帳)——『真実の鞭』に収録。

処女地 6号 大11・9 鷹野つぎ「疲れ」(小説)——結婚後八年、四度目のお産の後の疲労の中で、澄子は、恋愛、結婚によって夫に「自分の全宝庫を明け渡した」寂寞感、機械的な日々であった結婚生活を回想。『ある道化役』に収録。

処女地 6号 大11・9 つぎ「人並みの人間」(手帳)——「女なんて者は、書くよりも、着物の一枚も縫った方が気が利いている」と言われても「矢張り静かに矢面に立つて、堪えらるる」

事を習ふのも、我々の修養の一助」であり、物を書くという見苦しい女の誇りからのがれて「人並みの人間でありたい」。『真実の鞭』に収録。

処女地 7号 大11・10 鷹野つぎ「樋口一葉」(感想)——一葉は「一種の冷やかな自衛的考察」をもって、さまざまの同胞の生活相を描いた。『真実の鞭』に収録。

処女地 7号 大11・10 つぎ「家事のひまに」(手帳)——『真実の鞭』に収録。

処女地 7号 大11・10 つぎ「小野訓導の死」(手帳)——教え子と共に溺死した小野さつき訓導の殉難を世間は讃美しているが、女史が力の能う限りであった二人目を救助しただけに止めて存命していたら不名誉、怨嗟、叱責を免れなかったであろう。世間の讃辞こそ女史のやうな至純な人の心を脅し、死に駆らしめた軽浮な一面を持っているのではないか。『真実の鞭』に収録。

処女地 8号 大11・11 鷹野つぎ「二人の友」(小説)——故郷から上京した友が語った、二人の友の身の上。『ある道化役』に収録。

処女地 9号 大11・12 つぎ「家事のひまに」(手帳)——赤児が書斎にいる私を見つけて「非常な努力」をして近づいて来る情景のスケッチと、煩雑な限らない家事に力を落とさず「片隅の一つから熱心に叮嚀に始めて行かなければならない」という決意。『真実の鞭』に収録。前半は「赤子の努力」と改題して『子供と母の領分』に収録。

処女地 10号 大12・1 鷹野つぎ「告別」(目次では

「告別の言葉」)——私たちは「将来を俟つて熟さうとするもの、静かに自ら立つて歩まうとする者のために、期せずして集まつた一団に過ぎなかつた」。告別にあたつて「決して無形の処女地は失はれないと思つてゐる。のみかほんとうに私たち自身の鋤——斧をもつて各自の領分に力を尽すのは、これからの時と思つてゐる。それほど私たちにとつて開拓すべき未踏地は、悠久であり広^{アサ}である」、家庭と子供を持つ私が筆を執ることは「大体は他の仕事に非常なはげみとなつた」、「今や『処女地』を送るに際して、私の希ひは悠久な『処女地』を迎へると云ふことである」「私の『処女地』は悠久に自分の内部に生きなければならぬ」。

「悠久の処女地」と改題して『真実の鞭』に収録。

なお、10号「執筆者別総目録」によれば「近時の消息」欄(無署名)は、つぎの執筆である。「制度の考案と現今の家庭生活との関係」(3号)は、『真実の鞭』に(改変し「制度の性質」として「女性の前途」にも)収録。「女子工芸品展覧会」『学びたい女性のために』(1号)、「子供会の新設」『サンガー夫人の動静』(2号)、「細民の児童のために」『英国の上院には婦人議員を入るるか』「公娼問題の討議」『朝鮮婦人救済』「ミシンの内職」(3号)、「全国小学校女教員の団結」『一葉碑の建立』「婦人の生活を簡単にしたい」(4号)等が取り上げられている(4号掲載「本誌のやうな雑誌の性質としては、直接に時事問題に触れることを許されてありません」という理由で同欄は4号で終了したと考えられる)。

取り上げられた記事は、当時の婦人に関するあらゆる問題によく眼の届いたものである。つぎは療養所生活中も、総合雑誌、新聞(東京朝日、東日、読売)を読んでいる(「読書余録」『幽明記』所収)。つぎの作品の題材は、ほとんど自身と身辺のことであるが、冷静な筆致の背後には、広い視野の中で自己の位置を顧みる態度があつたのだらう。

また、「書架」欄(6号から「わたしたちの手帳」欄)に掲載された、山崎斌『二年間』、サンガー夫人原著、奥俊貞訳「産児調節論」、澤ゆき子詩集『孤独の愛』(1号。澤ゆき子は「処女地」同人)、三ヶ島霞子著歌集『吾木香』、原阿佐緒著歌集『死を見つめて』(2号)、太田水穂歌集『雲鳥』(6号)等は、まとめて「読後の感」と題して『真実の鞭』に収録された。つぎは産児制限のサンガー女史に「処女地」時代から後年(「母子受難期」、『読売新聞』昭4・11・12等)まで関心を持ち続けた。困窮の中のつぎの多産が、過労、栄養不良、そして結核を引き起こす引き金となつたであろうことと重ね合わせたい。

『処女地』当時の藤村先生(「文章往来」藤村号 大15・4)をはじめ、つぎによる藤村の人物評は多く、定評がある。つぎは、「処女地」発刊に先立つ会合で、藤村に「どうかね、まだ日があるが書き直してみては」と言われ、「未熟な心にきびしい感じが来た」「克明な先生の作風が此のきびしさから来てゐるのだ」と思ったこと、「処女地」廃刊後も訪ねると「書いてゐますか」とまず問われたこと、つぎの家に奥村みさを、大井さち子、野村千

代、伊東英子等の同人が訪れたこと等を書き、結婚前の静子と出会って『処女地』を同じ住家とした人々のなつかしさは格別であつた」と書いている（『処女地』時代の島崎藤村先生、秋田雨雀編『島崎藤村研究』楽浪書院 昭9・11所収。伊東一夫『藤村書誌』昭48・10所収文には序文のようなものが付いている）。

東氏前掲書所収の若山喜志子書簡（大11・1・20）からは、『女子文壇』で共に活躍した喜志子に、つぎが『処女地』の原稿依頼の手紙を送つたことがわかる。後年、『子供と母の領分』出版記念にことよせて、生田花世⁽⁸⁾、伊福部敬子が寄付を集めた（『倒れた母の芸術』起こす情の手 鷹野女史を慰める、『読売新聞』昭11・4・16等）。「見舞金拠金出に関する報告書」（東氏前掲書所収）には、拠金者として、奥むめを、島中雄作、長谷川時雨、吉屋信子、平塚らいてう、等と共に、『処女地』同人であつた、田尻稲子、森植栄（三木栄子）、正宗乙未、若山喜志子、島崎静子（藤村の代理でもある）、そして発起人の生田花世の名が見える。「川島つゆ子氏よりは著書の一部おわけいただきたいと申込まれております」（長谷川時雨 昭11・4・23）とある川島つゆも『処女地』の同人であつた。『処女地』の縁は、後年まで続いたのである。

つぎは、大正九年に『新小説』、翌年に『早稲田文学』と『飛び飛びに書』き、「引きつゞき発表するといふ自由」もなかった『処女地』に「同人として入つてから、毎月書くやうになつたけれども僅か一〇ヶ月で廃刊になつた」と書いている（『文壇へ

出るまで』、『文章倶楽部』大12・11）。短期間ではあつたが、当時乳呑児を含む四人の子供を育てながら、『処女地』という継続的な発表誌によつて研鑽を積んだことは、つぎの作家生活の土台となつたといえよう。また、つぎは、娘、妻、母となる生活の中で持ち続けた「心の底」の不思議な「抑へがたいもの」に「自由に、全我をあげて」対してゆきたい（『理想の実際の尊重』、『婦人公論』大12・5）と書いた。つぎが「自分等の内部から生れて来るものを育て行きたい」（『読者へ』1号）という、『処女地』の一つの方向を体现した作家であつたことは間違いないだろう。

四、若杉鳥子（板倉とり子）

（一）明治二五「一八九二」年二月二五日～昭和一二「一九三七」年二月一八日。東京下谷生まれ。本名、板倉とり。茨城県古河の豪商と神田貸席の女中の子として生まれ（戸籍上は、他人である田上徳五郎の長女）、古河町の芸妓置屋若杉はなの養女となり、さらに学齢まで貧農に里子に出された。尋常小学校卒業後は芸妓の修行をさせられたらしい。『女子文壇』『文庫』等に詩文を投稿し、横瀬夜雨に指導を受ける。『女子文壇』では上位入選が多くなり、投稿仲間の水野仙子、生田花世、今井邦子、鷹野つぎ、菊池柳子らと交流を深める。家業を厭い明治四一年、一六歳で上京。帰郷を繰り返しつつ、上流家庭の小間使い等をして自活の道を探り、翌年中央新聞の記者となる。明治四四年、元備中松山藩主板倉勝弼子爵の庶子で、萬朝報の記者をしていた板倉勝

忠と結婚（入籍は大2）。二女を生むが、長女は四歳で病死。若山牧水の「創作」や、「珊瑚礁」、生田春月の「詩と人生」等に詩歌を発表。急な坂を上る牛と牛方の努力、負ぶった赤ん坊を他人にやらなければならない母親等を描いた小説「烈日」（「文藝戦線」大14・10）で認められ、ビル工事現場で感電死した工夫の足から貧しい里親を思う「梁上の足」（「解放」大15・10）でプロレタリア作家として地歩をかためた。平林たい子、林芙美子らと「社会文芸連盟」を結成、プロレタリア作家同盟に加盟し、宮本百合子、佐多稲子らと「働く婦人」の編集に関わった。消費組合運動に参加、解放運動犠牲者救援活動にも参加。昭和八年、小林多喜二の通夜に出席、治安維持法違反容疑で拘留された。公娼制度下の実例「ある遊郭での出来事」（「婦人公論」大14・8）、息子の死をきっかけに娘の社会的闘争を理解し自らも救援運動に参加するようになる「母親」（「月刊批判」昭6・11）、芸妓から芸妓置屋の経営者となった小巻の葬儀のために帰郷した運子^{うんこ}が、他人の血を吸って生きていると極貧の女房に悪態をつかれるような芸妓達、置屋である養家の生活を回想し、親兄弟のために働き通した小巻の一生を思う「帰郷」（「婦人文芸」昭9・9）等、体験や見聞をもとに、虐げられた女性や労働者の姿を、社会の中に共感をもって描いた。四四歳で病没。

翌年、「印刷に附することの不適当なもの」を省いて、『帰郷』（小山書店 昭13・9）が松本正雄の編集により、外務省に勤めていた夫板倉勝忠の手で出版された。平成二年郷里古河総合公園に長

塚節と鳥子の歌碑、平成六年古河の養家近くに文学碑建立。

『日本近代文学大事典』『現代女性文学辞典』『日本女性人名辞典』『詩歌人名事典』等に項目が立てられている。

(二) 評伝に、古河在住の奈良達雄『若杉鳥子 その人と作品』（東銀座出版社 平19・6）がある。同氏には「若杉鳥子の作品と生涯についての一考察」（『民主文学』平6・6、『文学の先駆者たち』あゆみ出版 平10・8に所収）、「若杉鳥子の業績の評価をめぐって」（『民主文学』平18・1）等もある。同じく古河在住の林幸雄氏の尽力で、『渡良瀬の風 若杉鳥子短編集』（武蔵野書房 平10・11 略年譜付。増補改訂版は平20・8）、『水塵 若杉鳥子詩歌集』（同 平11・12）、『空にむかひて 若杉鳥子随筆集』（同 平13・11）がまとめられた。林氏による「若杉鳥子」のホームページ <http://www.ne.jp/asahi/waka/sugi/> は、年譜、執筆目録、鳥子をめぐる人々等をおさめている。同氏には「若杉鳥子」そのプロレタリア文学への途」（『社会文学』平16・6）等がある。横瀬隆雄『横瀬夜雨と長塚節』（筑波書林 平18・5）等にも取り上げられている。

(三) 「棄てる金」は「堅実なリアリズムだが、更に一步深く掘り下げて欲しい」（赤木健介「陣営を俯瞰して」、「文芸市場」昭2・2）、「友人であり、尊敬する先輩である若杉鳥子氏の作品の、ちやうど、氏にお目にかゝった時に感じるやうな一種の弱さを、いさゝか物足りなく思ふけれど、あざやかな物のつかみ方にはやはり感服せずには居られない」（平林たい子「女流作家月旦」、

「若草」昭2・7）等と評された。なお、鳥子は山の手の暮らしとプロレタリア作家同盟に在る矛盾に苦しんでいたことを、松田解子（『回想の森』新日本出版社 昭54・4、『女人回想』同 平12・8）等が書いている。

『現代婦人の手紙』（前出 大13・4）に「行方知れぬ人へ」、「続プロ作家最近傑作選集」（解放社 大15・12）に「少女と室壺」「梁上の足」、「年刊日本プロレタリア創作集（改訂版）」（日本プロレタリア作家同盟出版部 昭7・3）に「母親」、「茨城近代文学選集Ⅲ」（平輪光三編 常陽新聞社 昭53・3）に「帰郷」「梁上の足」「桜の寄贈者」「傷ついた笑」、「日本プロレタリア文学集21 婦人作家集（一）」（新日本出版社 昭62・9）に「烈日」「梁上の足」「棄てる金」「母親」、「恋愛のススメ」（フロンティア文庫編集部編 平17・5）に「新しき夫の愛——牢獄の夫より妻への愛の手紙」収録。

（四） 処女地 3号 大11・6 板倉鳥子「ある貧しき女の手紙」——複雑な関係にある実父に宛てた手紙。『帰郷』に収録。

処女地 6号 大11・9 板倉鳥子「都会を離れて」（歌）

処女地 7号 大11・10 板倉鳥子「山査子の花」（詩）

処女地 9号 大11・12 板倉鳥子「病者の歌」（歌）

——「詠ひつゝ三十年の道伴れの病はおのがものとおもへる」等。喘息が持病だった。

処女地 10号 大12・1 板倉鳥子「孤独の中より」——

「表面ばかりの体裁ばなし」の生活の中で「真」と「率直」に飢

え、交友を思い、「是から導かれやうとする機縁が出来たのに」廃刊になる淋しさと、感謝 発表した文章は、藤村『飯倉だより』にある「熱い菓子」（熱くなければまるで味のない菓子）「にも値しないものだつたと独りで苦笑しました。深く自分の将来を戒めたりしました」。

処女地1号「おとづれ」欄にも「旅先より」として、雑誌の創刊が「春と共に待たれます」という便りが掲載されている。

鳥子は、「女子文壇」の後、大正期には短歌が多く、「処女地」の数年後からプロレタリア小説を発表するようになる。「処女地」に実父宛の手紙形式で書いた小説「ある貧しき女の手紙」には、富を築いた実父が「外国の革命沙汰や、労働問題の紛糾」を心配し、「私と対座すると定つて話題をそつちの方へ持つてゆかれるのはどういふ訳であらうか、久しく違わなかつた娘の此の頃の考えを知らうともお思ひになるのですか」とある。鳥子が「処女地」時代ですでに労働問題等に関心を持っていたこともうかがえる。

また、「女子文壇」に共に投稿していた小学校の同級生に宛てた「追憶のまゝに」（「婦人倶楽部」昭2・4）には「家庭に許り閉じ籠らずに、昔の親友を思い出して御通信ください」「窓を開け放つて新鮮な空気をいれて下さい。／ほんたうに不幸な時も幸福な時も、夢に見るのはあなたの事許りで」とある。これは「窓を開けはなて、自由な空気をそゝぎ入れよ」という「処女地」創刊号のロランの言葉をを下敷きにしていよう。ロランの言葉は鳥

子の心に刻まれたのである。

「女子文壇」誌友会で共に幹事をした先輩、生田花世が「処女地」に載せた「ある主婦の詩」(6号)は、鳥子との交遊を書いた詩であった。また、鳥子の「旧師の家」(『空にむかひて』所収)には、「女子文壇」からの師、横瀬夜雨の家を訪れ、「処女地」同人であった夜雨の妻多喜と「東京の話、文壇人の噂等をしながら」歩いたことが書かれている。

「処女地」は、閉ざされがちな生活に「自由な空気」を入れ、女性が「率直」に発表できる場を提供することによって、鳥子が小説に立ち戻るきっかけを与えたといえよう。

結び

「処女地」に執筆した女性作家達二一名中、五名が「女子文壇」で活躍していたことから、改めて「女子文壇」の影響力の大きさがわかる。本稿で取り上げた加藤みどり、鷹野つぎ、若杉鳥子の他に、生田花世、若山喜志子もまた「女子文壇」の誌友であった。「女子文壇」にはじめて署名入りの作品が掲載されたのは順に、生田花世一六歳(明38)、加藤みどり一七歳(上京後 明39)、若杉鳥子一四歳(同)、若山喜志子一九歳(明40)、鷹野つぎ一七歳(同)の少女時代である。ほぼ一五年後、全員が上京して結婚生活を営み、「処女地」に集ったことになる(みどりは没後、喜志子は静岡県沼津在住であった)。

みどりと花世は「青鞥」でも活躍した。花世の『恋愛巡礼』に

対して、みどりは「私は何処までも恋愛は崇高であつて欲しい」と書いている(『生田花世女史に与ふ 生活の恋愛化』恋愛の生活化?、「婦人雑誌」大4・10)。自由結婚をした、みどりやつぎは、恋愛、結婚によって「自分は何も彼も棄てたのに」(つぎ「嘆き」という思いを書くが、それゆえに一層、恋愛は崇高であり続けたらしい)。

「恋愛の代りに因縁」ばかりが残っていた(「減び行く生に対する伴奏」前出)と書いた夫朝鳥も、みどりの執筆は激励らしい。結核等で七人の子供を亡くし自らも結核療養生活を送る中で書き続けたつぎの没後の四著作、貧農の里子となった体験や芸妓置屋であった養家での見聞を下敷きとしてプロレタリア作家の草分けになった鳥子の遺稿は、夫によって出版された。執筆には夫の理解が与っていたことである。しかしながら三人は、それぞれの個性はあるものの、いずれも、夫との乖離と相克、そして家事と育児に追われる家庭生活の中で筆を持つことの困難を書いた。時に家庭を呪いつつ(みどり)、「生活を創造」しようとしてつ(つぎ)「作家を志す女性へ」『女性の首途』所収、その葛藤を書いたのは、そこに自らの生があることを自覚していたからである。母性主義高潮と言われる時代に、子供を負担に思つ気持ちに率直に書いていることにも注目される。

みどりは「一度文学に志した者は倒れやうと起きやうとどうしても此の文学だけは捨てる事が出来ないやうな気がします」(『私の文学』、「新潮」大5・1)、鳥子は「譬えば男性が芸術上の悩み

を悩む時、女性はその悩みまでも取りつけないで藻掻いて来た」「その境涯に甘んじやうとしながらも、なお、私達はこの憂鬱な社会にあつてのただ一つの叫喚を挙げうるみちとして、表現形式として、何処までも文芸を見失うまいと努力して来た」「女流作家の道」、「文芸公論」(昭2・7)と書いた。芸術、文芸への信頼、熱い思いを持ち続けたことも三人に共通している。一方、批評には「女らしい」「女性の世界」といった評の多いことが目立つ。

「処女地」は、時期的に生前のみどりには関係しなかったが、文壇で『処女地』が生んだ唯一の闊秀作家」と評されたつぎにとつては、作家生活の土台を築いた発表舞台であつた。鳥子が「処女地」に発表した「ある貧しき女の手紙」は、数年後から発表されるプロレタリア小説につながる作品といえる。

みどり、つぎ、鳥子とは異なり、島崎静子は夫となつた藤村を師と仰ぎ続け、「創作に励む先生のため」に生涯を捧げた。藤村と静子との結婚は、「婦人の眼覚めを期待」して創刊された「処女地」のひとつの帰着である。「婦人の眼覚め」とは何だったのかという疑問も浮かぶが、それをしも「婦人の眼覚め」のひとつと言えるのが「処女地」であつたのかもしれない。「処女地」は、藤村の思い出を綴る静子にとって、執筆の起点であり抛り所であり続けた。

「処女地」は、「窓を開けはなて、自由な空気をそそぎ入れよ」というロランの言葉を引き、「自分等の内部から生れて来るものを育て行きたい(前出)」と表明したが、めざす方向を規定しなかつ

た。「処女地」の理念は、みどり、静子、つぎ、鳥子の誰によつても、生かされ、体现されたといえよう。

「注」

- (1) 『明治大正文学美術人名辞書』(松本龍之助編 立川文明堂 大15・4)、『日本近代文学大事典』(日本近代文学館 小田切進編 講談社 昭52・11・53・3)、『島崎藤村事典新訂版』(伊東一夫編 明治書院 昭57・4)、『現代女性文学辞典』(村松定孝・渡辺澄子編 東京堂出版 平2・10)、『日本女性人名辞典』(芳賀登「ほか」監修 日本図書センター 平5・6)、『日本現代文学大事典』(明治書院 平6・6)、『青鞥』人物事典—110人の群像—(らいてう研究会編 大修館書店 平13・5)、『詩歌人名事典 新訂第2版』(日外アソシエーツ株式会社編 日外アソシエーツ 平14・7)、『日本女性文学大事典』(市古夏生・菅聡子編 日本図書センター 平18・1)、『日本女性史大辞典』(金子幸子「ほか」編 吉川弘文館 平20・1) 参照。
- (2) 『新生』のモデルである姪のこま子(が、養育院に収容され、藤村が静子に見舞金を届けさせた、第二の新生事件と騒がれた事件(昭12)等。
- (3) 「手帳」は、「わたしたちの手帳」欄記載のもの。
- (4) 和辻哲郎「藤村の思い出」(「埋もれた日本」新潮社 昭26・9)には、「静子さんはある意味ではちょっと風変わ

りの、現代に珍しい婦人である。全身が藤村崇拜の結晶のようで「衣食住の一切のことから、さまざまの人間関係に至るまで、藤村の趣味や性向を絶対の権威として、すべてをそれに合わせるように努めた。それはいわば奴隷の態度であるが、静子さんはみずから進んでその態度を取ったのである」「創作家である藤村にとってはこれは非常な慰めであつたろうと思われる」とある。

- (5) 事典等に「八人中六人」とあるが、つぎに「七児を喪ひて」「新女苑」昭16・9」という文や「七人の子の遺品」を歌った短歌(昭16)等もある。死産したらしい女兒を含めて七人という、つぎの意識に合わせた。その生活については「子供は四人で、火は炭で、水は井戸で」は後任の台所助手に来てくれる人がいなかった(大13頃「子供は虐げられる」「子供と母の領分」所収)等とある。

- (6) プロレタリア陣営からの「その思想生活を社会主義にまで高めて行かなくてはならない」(堀江かど江「鷹野つぎ氏に答ふ」、『読売新聞』昭2・7・25(28)等という批判に対して、つぎは「叫び行ふもののある一方には、内に内にとその中軸に触れて行く」者もある、「すべての客観価値に達する前提には、私たちの純正な認識濾過の必要がある」と答えている(「余りに生活的である」、『同 昭2・8・5、6』)。

- (7) つぎ、鳥子の他、「処女地」同人の若山喜志子、澤ゆき、

辻村乙未、長坂きくじ、生田花世、横瀬多喜の手紙を収録。

- (8) 花世は『近代日本婦人文芸女流作家群像』(行人社 昭4・11)において、「女子文壇」では「みどり女史もしつかりした筆をもつてゐた」、つぎ子さんが「女子文壇」から「処女地」を経て「今の地位を確実に文壇におしめになるまでの文芸そのものに対する純愛といふやうなもの、それには涙ぐましいものがあつたやうである」、「世評、地味だ寂しい」と言われているが、大部分の女が「まさに代弁してもらへてゐる様な気がするらしい」ところにその立場も強みもある、「プロレタリアや女流作家として最近評判のよい」若杉鳥子氏は「現世に対して不満と反抗」を持つているその「性格が、プロレタリア的である」、生活が明るくなるほど「一層、憂鬱になり、叛逆的になる」、と評している。

- (9) 東栄蔵「鷹野つぎ試論」(東氏前提書)には、『処女地』での活動を通じて次第に確かなものになった人間観とある。

「附記」 本論は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究Cによる研究成果の一部である。